

令和元年6月21日現在

機関番号：25503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16785

研究課題名(和文)ラフカディオ・ハーンの邦訳研究 再話作品を中心に

研究課題名(英文)A Study of the Japanese Translations of Lafcadio Hearn's Retold Works

研究代表者

風早 悟史(Kazahaya, Satoshi)

山陽小野田市立山口東京理科大学・共通教育センター・講師

研究者番号：00710344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：ラフカディオ・ハーンの再話作品の邦訳を分析し、それらが形作ってきハーン像を明らかにするという目標を達成するため、本研究ではまず、数多くの再話作品のうちで最も有名な「耳なし芳一の話」を分析の対象とした。翻訳理論研究の成果を援用しつつ、それぞれに特徴のある翻訳者の訳を分析することにより、まだ研究の余地はあるものの、ハーンの邦訳史には、日本人が読む日本語作品としての自然さを優先する訳から、それとは対照的に、ハーンの目に映った「異国」としての日本を前景化する訳へと向かう流れが見出せることを指摘した。

また、『赤い鳥』によるハーンを受容を調査し、現在まで続くハーンと児童文学との深い関係の起源を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラフカディオ・ハーンの邦訳には長い歴史があり、邦訳作品の数も多く、訳文の趣向も多様である。本研究の学術的意義の一つは、翻訳理論の用語を援用してそれらの邦訳手法の特徴を記述したことである。ハーンの再話作品の邦訳には、大きく分けて、日本人が読む日本語作品としての自然さを優先する訳と、ハーンの目に映った「異国」としての日本を前景化する訳という、2種類の邦訳方針が認められるが、そこには日本人のハーンに対する見方があらわれているといえる。また、日本児童文学におけるハーンを受容を探るため、ハーンと『赤い鳥』との関りの一端を明らかにできたことも本研究の成果の一つである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to reveal how the image of Lafcadio Hearn has been shaped in Japan through analyzing the Japanese translations of Hearn's retold works that were written during his stay in Japan. In this study, I mainly analyzed the Japanese translations of "The Story of Mimi-Nashi Hoichi," which is one of the most famous stories written by Hearn. Through comparing the Japanese versions of the story and employing the theories of translation studies, I described two contrasting translation styles. Some Japanese translations were so well written that they appeared to be original and untranslated. In contrast, others tried to emphasize the foreign eyes of Hearn. Although I need further research, the newer translations are more conscious of the latter translation policy.

I also investigated Hearn's stories appeared on the magazine "Akaitori" to reveal the origin of his popularity in the field of Japanese children's literature.

研究分野：比較文学、翻訳研究

キーワード：ラフカディオ・ハーン 小泉八雲 翻訳 トランスレーション・スタディーズ 受容

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の邦訳には100年を超える歴史があり、邦訳作品の数も多く、訳文の趣向も多様である。しかし、それらが日本におけるハーン(八雲)像の形成に及ぼした影響については大いに研究の余地があった。

### 2. 研究の目的

ハーンが残した作品のうちで、日本で最も広く読まれている再話作品を中心にハーンの邦訳史をまとめるとともに、個々の作品の邦訳手法を分析する。さらに、それらの個別研究を通して、時代による邦訳手法の移り変わりや、日本におけるハーン(八雲)像の形成において翻訳が果たしてきた役割を明らかにすることを目指す。

### 3. 研究の方法

- (1) ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の邦訳作品を収集・整理する。
- (2) 収集した邦訳作品について、ハーンの英文と邦訳との、または、邦訳同士の比較研究を行う。一つの大きな研究基準として、「ハーンの英文に忠実な訳」を一端に、それとは反対に、「日本語に戻す訳」をもう一端においた評価軸を設定する。ハーンの英文は日本文化や社会に馴染みの薄い当時の欧米の読者に向けて書かれているため、前者の方針のようにそれらをすべて忠実に訳すと、日本人にとっては冗長で説明的に感じる箇所がある。しかし、それはハーンの英文の特徴を再現しているという点では意義のある訳である。一方、後者の日本語に「戻す」訳し方では、日本語の作品としてはより自然で読みやすい文章に仕上がるが、ハーンの英文からは離れてしまう。本研究では、このような二つの翻訳方針の間を揺れ動きながらハーンの邦訳が行われてきたことを明らかにすることを目指す。個々の邦訳の分析にあたっては、近年の翻訳研究(トランスレーション・スタディーズ)の成果も援用する。
- (3) ハーンの邦訳に携わった人々について研究する。これまで、ハーンの邦訳には、研究者だけでなく、翻訳家や作家など、さまざまな立場の人が関わってきた。彼らがどのような動機でどのような社会的・文化的背景のもとで邦訳をするに至ったのかを調査する。
- (4) 以上の研究を通して、日本でのハーン(八雲)像の形成において翻訳が果たしてきた役割を明らかにすることを目指す。

### 4. 研究成果

- (1) 日本時代に書かれた再話作品に限定しているとはいえ、ハーンの邦訳作品の数は非常に多い。そこで、本研究では、その中でおそらく最も広く知られているであろう“The Story of Mimi-Nashi Hōichi”の研究から始めた。その成果の一つである論文「ラフカディオ・ハーンの邦訳研究 平井呈一訳「耳なし芳一のはなし」の功罪」で取り上げた平井呈一は、ハーンの作品の主要な翻訳者の一人であり、ハーンの邦訳史を研究する上では無視することのできない人物である。1940年に岩波文庫の一冊として刊行された平井訳の『怪談』は、現在まで刷を重ねており、定訳としての地位を確立している。平井の邦訳は、ときに翻訳であることを忘れさせるほどの「名文」であるが、それだけに、英文には存在していたはずのハーンの「外国人」としてのまなざしを薄めてしまっているという問題点もある。本論考では、ドイツ・ロマン派の神学者フリードリヒ・シュライアーマハーの翻訳論や、翻訳理論家のローレンス・ヴェヌティが提唱した「受容化(domestication)」と「異質化(foreignization)」の翻訳方針を援用しながら、そのような平井訳の功罪について論じた。ハーンの邦訳史において、平井の訳は「受容化」する翻訳の見本として位置付けることができる。

同じく論文「ラフカディオ・ハーンの「厚い」翻訳 “The Story of Mimi-Nashi Hōichi”の邦訳を例に」では、斎藤正二訳の「耳なし芳一のはなし」(『完訳 怪談』、講談社、1976)を取り上げた。斎藤訳の特徴は、それまで省かれることの多かったハーンによる原注まですべて訳し、さらにそこに訳者による注釈まで付けたことである。本論考では、そのような斎藤の邦訳方針が、クワメ・アンソニー・アッピアが提唱した「厚い翻訳(thick translation)」の一種と見なせることを指摘した。また、日本に対して「外国人」であるハーンが同じく「外国人」の読者に向けて日本の物語を紹介していたという事実をより鮮明に浮き彫りにしてみせる斎藤の訳は、初めから日本語で書かれていたかのように思わせる平井の訳とは対照的であるといえる。2014年から2016年にかけて発表された円城塔による『怪談(Kwaidan)』収録作品の斬新な新訳も、当時の英語圏の読者の視点に立って訳されているという点では、斎藤の訳に通じている。

邦訳が充実しているハーンの世界の中で最もとりわけ何度も訳されてきた『怪談』を基準にしてハーンの邦訳史を眺めてみると、まだまだ研究すべき余地はあるものの、ハーンの世界には、平井のように、日本人が読む日本語作品としての自然さを優先する訳から、斎藤や円城のように、ハーンの世界に映った「異国」としての日本を前景化す

- る訳へと向かう流れを見出すことができる。
- (2) ハーンの怪談の多くは日本児童文学の世界でも長らく親しまれてきたため、日本におけるハーンを受容を研究するにあたっては、両者の関係についても考察する必要がある。本研究では、その端緒として、『赤い鳥』におけるハーン受容を調査した。『赤い鳥』は大正期に鈴木三重吉によって創刊され、のちの日本児童文学に大きな影響を及ぼした児童雑誌であるが、ハーン作品も複数掲載された。論文「『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン 茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」を通して」で取り上げた「赤穴宗右衛門兄弟」は、ハーンの「守られた約束( Of a Promise Kept )」の児童向けの翻訳であり、作者の茅原順三と森三郎は、のちに『赤い鳥』の中心的な寄稿者の一人になった児童文学者である。両作品を比較してみると、森版では、ハーンの原文の怪奇性が抑えられるとともに、兄弟愛のテーマが前景化しており、より児童向けの読み物になるよう調整されていることがわかる。同じ作者による「おばあさんと鬼」と「鐘」も、ハーン作品をもとにしていて考えられる。翻訳ではないが、三郎の兄であり、書誌学者・文筆家として活躍した森銑三は、同誌にハーンの小伝を掲載しており、怪談や虫、草花など、小さくてはかないものの中に日本の美を見出した西洋人の文豪という一つのハーン像を描き出している。

調査の結果、森三郎以外にも、『赤い鳥』にはハーンの怪談・奇談が掲載されていたことがわかった。論文「日本児童文学の中のラフカディオ・ハーン 「鳥取の布団の話」を通して」で考察の対象とした下村千秋は、ハーンの紀行文「日本海のそばで( By the Japanese Sea )」をもとにして「神様の布団」を、「果心居士の話( The Story of Kwashin Koji )」をもとにして「生きた絵」の話」を、「耳なし芳一の話( The Story of Mimi-Nashi Hōichi )」をもとにして「壇の浦の鬼火」を書いた。

森三郎の「赤穴宗右衛門兄弟」を除き、ここに挙げた作品はいずれも底本がハーン作品であることを明らかにしてはいないが、そうであることは両者を比較すればわかる。怪談ものを中心にして、これまで複数の出版社がハーン作品を年少読者向けに翻訳してきた。それらはいまだに日本人とハーンとの主要な出会いの場として機能しているが、その下地を作ったという点で『赤い鳥』は重要な媒体であったといえる。

- (3) 以上、(1)と(2)が本研究の主な成果である。(1)で考察の対象とした平井呈一はハーン作品の主要な邦訳者の一人であり、「耳なし芳一の話」もハーン作品の最もよく知られた作品であるが、取り上げるべき邦訳者と作品は他にも数多く存在しており、ハーン邦訳史をまとめるには今後も調査と考察を続けていく必要がある。今回の研究では取り扱うことができなかったが、『怪談』に代表される再話作品だけでなく、日本の文化や社会についての随筆や紀行文でもハーンは優れた作品を残しており、日本におけるハーン像の形成と変遷を明らかにするためには、当然それらの邦訳も考慮に入れなければならない。

ヴェヌティヤやアッピアの翻訳理論を援用し、誤訳の有無や日本語としての巧拙といった従来の評価基準とはまた別の視点でハーン邦訳を読み直したことは本研究の特色であるが、トランスレーション・スタディーズは、学際的に発展してきた広大な研究領域であるため、今後も研究を続けていく必要がある。

(2)で述べたように、『赤い鳥』という日本児童文学史上で重要な位置を占める媒体とハーンとの関りの一端を明らかにできたことは本研究の大きな成果である。しかし、『赤い鳥』以降、ハーンと日本児童文学との関係はより深いものとなるため、(1)と同様、さらなる研究が必要である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

風早悟史「ラフカディオ・ハーンの「厚い」翻訳 “The Story of Mimi-Nashi Hōichi” の邦訳を例に」(『山陽小野田市立山口東京理科大学紀要』第2号、2019年、pp. 35-41) 査読有

木田(風早)悟史「ラフカディオ・ハーン邦訳研究 平井呈一訳「耳なし芳一のはなし」の功罪」(日本比較文化学会『比較文化研究』No. 130、2018年、pp.37-46) 査読有

木田(風早)悟史「日本児童文学の中のラフカディオ・ハーン 「鳥取の布団の話」を通して」(三重大学英語研究会『PHILOLOGIA』49、2018年、pp.23-39) 査読無

木田(風早)悟史「『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン 茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」を通して」(三重大学英語研究会『PHILOLOGIA』48、2017年、pp.21-35) 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

木田(風早)悟史「ラフカディオ・ハーン「鳥取の布団の話」の変容」(日本比較文化学会第30回九州支部大会、2018年)

木田(風早)悟史「『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン 茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」を通して」(日本比較文化学会支部合同12月例会、2016年)

木田(風早)悟史「ラフカディオ・ハーンの邦訳研究 平井呈一訳を再考する」(日本比較文化学会全国大会・2017年度日本比較文化学会国際学術大会、2017年)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。